

河内重雄著『日本近・現代文学における知的障害者 表象：私たちは人間をいかに語り得るか』

長野, 秀樹
長崎純心大学人文学部：教授

<https://doi.org/10.15017/27419>

出版情報：九大日文. 20, pp.98-101, 2012-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



◎書評

河内重雄著

『日本近・現代文学における

知的障害者表象

——私たちは人間をいかに語り得るか——』

NAKANO
HIROHITO
長野 秀樹

河内重雄著 『日本近・現代文学における知的障害者表象

——私たちは人間をいかに語り得るか——』（九州大学出版会、平成二四・三月）は、氏によって九州大学に提出された同題の博士論文に加筆訂正されて出版されたものである。

まずはその目次を紹介する（各章の副題は省略する）。

序章

第二章 國木田独步「春の鳥」論

第三章 芥川龍之介「儼盜」論

第三章 石井充「白痴」論

第四章 山下清の語り方

第五章 大江健二郎『静かな生活』論

第六章 青木有一「石」論

終章

知的障害に関する記述を含む作品・事項一覧

四二〇ページに及ぶ本書の中で「作品・事項一覧」は上下二段組みで二〇〇ページを超え、その緻密な作業に驚かされるが、そのことには、後程、触れることにして、まずは取り上げられた作品を見てみよう。

明治三七年初出の「春の鳥」から、平成十七年初出の「石」まで、取り上げられた作品の時代は幅広いが、「知的障害者」像の変遷を追いながら、河内氏の視点は一貫していることが、まず本著の特徴であろう。それは副題にもよく表れているが、河内氏は「序章」で「どのような学問領域においても、「白痴」について語ることは、間接的に人間について語ることであり」と述べ、さらに文学との関わりにおいて、次のように述べている。

例えば哲学では、はるか昔から人間とは何ぞやと問われ続けてきたが、「白痴」を持つてくることで人間とは何ぞやと問うのは、文学的な問いであると言っても、過言ではないのではあるまいか。

もちろんこうした視点が成立する基盤には、河内氏も指摘するように、近代的「人間観においては意志が中心的な要素であり」「理性、特に意志あつての人間であり、意志があることは、人間であることの必須条件とされ」るような、人間観がある。そして、こうした人間観の反対側に「白痴者」を「理性や意志を持たぬ」者として見る「白痴」観が、「人間観」と「二項対立（人間／「白痴者」）」する形で成立しているのである。

河内氏は「春の鳥」の語り手でもあり、主人公でもある「私」が六歳を見る視点にもこうした視点が潜んでいることを、明らかにしている。特に「私」が「数学」と「英語」の教師であるという設定の重要性の指摘は、大きな意味を持っている。数学という科学の基礎となる学問と英語という言語の翻訳に係わる学問の専門家としての「私」が六歳を当時の「科学的」な「人間観」の範囲で理解する一方、六歳の意志を「私」たちの共通の言語へと「翻訳」することが「私」にはできない。それは、結局、「意志があつての人間なのであれば、その意思を翻訳し得ない」ということは、六歳は人間ではないということの意味する「ということになるう。」

もちろん、これは「春の鳥」という作品が、語り手と主人公が連続する、一人称回想形式をとっており、作品世界を「私」が、語り手と主人公という、二重の「権力者」として、律しているということとも関係してくる問題でもある。

一般的に言えば、翻訳不可能性の責任をだれに求めるかは、

原話者（六歳）の問題であると同時に翻訳者（私）の問題でもあるからである。さらに言えば、それは語り手の視点と重なり合つてしまふ読者の視点の問題でもある。六歳の言葉を翻訳できないままに満足してしまふ語り手・主人公の「私」とは、そのまま読者である「私たち」の謂いである。

第二章の「偷盗」論では、阿漕が母になることの意味が中心的に論じられている。「白痴者」に近い「阿呆」である阿漕に「無垢なる母」を見る論と大正期の「社会ダーウィニズム」の文脈の中で、倫理観念を持ちえず、犯罪に走りやすいとされる「白痴者」像との対比から、論は展開されるが、「母になれる」喜びを前面に示す阿漕の内面を直接に語っている点において「偷盗」は「春の鳥」の語り手の「一歩先に進んでい」て、「白痴者」は人間だというメッセージが読みとれると考える」と河内氏は結論付けている。たしかに、内面という、いわば理性や知性に係わる面は確かに語られている。そうした点において、「人間」に「近い」と言えなくもないだろう。しかし、人間とは何かという問いに対する答えとしては、「偷盗」の「阿漕」の姿は大きな枠組みの変化を示してはいない。強調されるのは無垢なる「母性」だからである。さらに、意思疎通のレベルが六歳と阿漕とは異なっている。障害の「程度」という問題については、河内氏も著書の後半部で触れているが、ここでも慎重な判断が求められるのではないだろうか。

第三章石井充「白痴」論では、主人公「謙介」が医学部の学生時代に脳病に侵され、帰省を余儀なくされたのち、「百姓」

として生きる姿と昭和初期の日本の思想、社会体制にも大きな影響を持った農本思想が比較、論じられている。農業と「白痴者」との関連は河内氏も指摘するように、ドストエフスキーの「白痴」のムイシュキン公爵やトルストイの「イワンの馬鹿」におけるイワンなどに原型が認められるだろうし、宮澤賢治の「デクノボー」なども相通じる所謂「聖なる愚者」観が反映されてもいよう。それが加藤完治などが中心的な働きをなした戦前期の農本主義との関連で論じられているところに本論の特徴がある。当時の特徴として、農業はさほど知的能力が高くないことも、体が丈夫であれば、従事できる職業だと考えられていたことを河内氏は、まず指摘する。そしてそれが、教育不可能な存在と考えられていた「白痴者」でも、「学校教育を否定し、実際の農業体験を重視する農本主義の人間観」と合致したのではないかと考えている。

こうした指摘は、大変重要な指摘であろうと思われる。「聖なる愚者」としての「白痴者」が、勤勉な「百姓」として描かれることは、先の例からも古今東西を問わずに多い。現代農業が、肉體労働から知的労働へと転換していることは論を俟たないが、農業の持つ生産性と自然への近接性は、未だに「聖なる愚者」としての「知的障害者」を再生産させているともいえるからである。

後半の三本の論文は、昭和三〇年代以降の知的障害者表象を代表する三作品についての論である。これらの主人公たちには知的障害という以外に共通な特徴を持っている。それは、彼

らは知的障害を持つと同時に、大きな才能を持っているということである。

山下清はむしろ、知的障害という側面よりも、時として「天才画家」という側面が強調される。また、「イイヨー」の物語は『静かな生活』（平二・一〇月、講談社）が中心に論じられるが、『個人的な体験』（昭三九・八月、新潮社）から『新しい人よ眼ざめよ』（昭五八・六月、講談社）などの主人公として、作曲家として独自の才能を持つ人物としても周知である。また、こうした実在の人物をモデルとする「物語」とは違い、青来有一の「石」の主人公に特定のモデルがあるかどうかは、詳らかにしないが、主人公修には異常な記憶力があり、それがサヴァン症候群と呼ばれる症例であることを、河内氏は指摘している。山下清もまた、「イデオ・サヴァン」（賢い馬鹿）の「主要な例」であると考えられる。映画では「レインマン」（昭和六三）でダスティン・ホフマンが自閉症で驚異的な記憶力を持つ主人公レイモンドを演じて、知られるようになった。

そうした意味では、それぞれの主人公は、きわめて個性的な「知的障害者」であるといつてよいのだろうか。「個性的」と言うのは、いわば彼らをカテゴライズしている「知的障害」という医学モデルから、ずれた部分を持ち、それらが彼らの社会的存在意義となつているという意味である。

そうした意味では、日本の社会は、昭和三〇年代以降になつて、漸くステロタイプな「知的障害者表象」から個性を持つ「知的障害者表象」を持つようになったと言つてよいのかも

しれない。

特に山下清においてその個性は式場隆三郎という、精神科医によって見出され、プロデュースされることによって、社会的に「受容」されることになった。その過剰な関与の在り方は第四章に具に論じられているが、その功罪はひとまず措くとしても、現在でも山下清が日本の社会の中で、もっとも認知された画家のひとりであり、同時にもっとも知られた「知的障害者」の一人であることは間違いないだろう。

また、「受容」の物語は「静かな生活」主人公とその家族にとつてもその通りであることを河内氏は指摘している。第五章で所謂「障害受容のモデル」は「個人的な体験」にも触れながら、詳しく述べられているので、ここでは繰り返さないが、そうした「受容」の物語の中で主人公Kの異質性に河内氏は注目している。

ただし、先ほども述べたように最後の三章の主人公たちは、サヴァン症候群（あるいは特異な才能を持つ）知的障害者である。これが河内氏の意図的な選択によるのか、そもそも昭和三〇年代以降の「知的障害者表象」の一般的傾向を表すものなのかを、河内氏に問うてみたい気がするのである。もし、一般的傾向であるならば、新たなステロタイプの出現の萌芽がそこには見えないかと思うからである。

また、もう一つ気になるのは、知的障害をコミュニケーション障害ととらえる視点から、これらの作品を論じた時にどうなるかということである。知的障害は社会モデルとしては、様々な視点から意味づけが可能な障害であろう。第一章に論じられた六歳の意志が翻訳不可能だったことを、六歳の知的障害の問題として論じるのではなく、「私」と六歳のコミュニケーションの不可能性として、捉えた時、その責任は「私」にもあることは、すでにのべた。同様に他の主人公たちも他者との双方向のコミュニケーションの問題として捉え直すことが可能なのではないかと思うのである。

最初にも述べたが、本書の後半部は明治以降の知的障害に係わる文学作品、文献、新聞記事などの「一覽」である。おそらくは一次資料やマイクロフィルムに直接あたることでのみ、この膨大な資料は確認されたのだと思う。それにかけられた時間と情熱は大変なものがあつたことだろう。

ただ、ここに資料はそろつている。さらに本書の各章の間を埋める論が、河内氏によって続くことを期待して、終わりとしたい。

二〇二二年三月 九州大学出版会 四二〇頁 六六〇〇円＋税

（長崎純心大学人文学部教授）